

本田先生への送別の言葉

社会体育研究所 所長 長 島 博

本田先生は昭和35年（1960）3月に東京教育大学体育学部を卒業され、その年の4月に専修大学に入職され、平成19年（2007）3月に70歳で定年退職される。その間、実に47年間在職されたことになる。本田先生は教育大では野球部に所属し、投手として在学中は活躍し、卒業して専修にきてからは東海大学などをコーチされ、その指導力は高く評価されていた。1960年以降における日本の社会は、60年安保や70年安保の問題をはじめとして学生運動が盛んになり、専修大学でも多くの事件が起きた。この頃から私立大学に学生が集まりだし、1950年代では18歳人口や就職難などの理由で10%台だったのが20～30%の高校生が大学に入学するようになった。

専修大学においても他の大学同様に受験生も増え、新入生が増え出したのもこの頃である。昭和30年前半では新入生が定員まで集まらずに専任教員が私立高校に勧誘にいった時代もあったという話しも聞いている。その頃の専修大学には経済学部、法学部、商学部の3学部しかなくその後経営学部、文学部ができ、少し遅れてネットワーク学部ができ現在の形になった。

保健体育は教養過程の一部として全学4単位必修で、実技と理論に分かれ、実技は通年で1単位、理論は通年で2単位というやり方で行っていた。

神田でも夜間部の実技があったので体育実技の展開数が非常に多く、持ち時間も10時間以上は当然のようであった。体育の教員は教授の下に助教授、専任講師、体育講師、実技講師という名称で位置付けられ教授以外はすべて実技担当であった。体育講師、実技講師は給料・待遇は助手扱いで授業を担当させるため名前だけの講師であった。カリキュラムは生田での午前・午後2時間。神田での夜間2時間、それに神田の勤労学生のための日曜ハイキング、その他シーズンコースとして水泳・キャンプ・自動車コース・スキー・スケートというように非常に多かった。本田先生はこれらのカリキュラムを真面目にそして常に学生のためにという信念で教育して現在にいたっている。

今、体育の教員は他の専任教員となんの差別もなく教育・研究に専念できるのは本田先生のような先人が頑張っていたからに他ならない。今後保健体育の教員は現状に甘えることなく努力して先輩諸氏が築いてきた保健体育教育をよりすばらしくしていきたいものである。本田先生長い間本当にご苦労様でした。これからの人生をお楽しみ下さい。